

サイバー・シティから



サイバー・シティ

架空都市の
巨大な構造物が
煙って浮かび上がる

地上の鉄を使い果たし
地表の人を働き潰し
長年かかり建造したもの

人間だけを生息せしめ
他の生き物は影もなくし
ステンレスの壁に自身を映す

屋上に緑を配したり
窓も無数につけたり
これは動かぬ巨大な船か

ただ 人はまだ人であり
いくばくかは辛うじて
生き残っている

番号をタッチすれば
室内が映し出される
誰もが見られている

チューブの栄養物を
口に絞り入れる貧相な体
お楽しみのための気だるさ

生息する未来人は
ことばを言うことも
書くこともなくなり

知っているという
薄っぺらな笑いと
動く眉で会話する

もう人とは呼ばないでおこう
ところを失った時には

神々は見放したのだから

サイバーを操る
上層階の個体に
下層階の多勢が奉仕する

サイバー・シティの第一日目

巨大建造物の入口は
およそ簡単な扉

城壁も監視塔もない
襲われる不安がない

敵対するものはなく
平和といえば平和

それぞれの個体には
英数字のコードネームが

ボクはもう
迎えられたのだろうか

あっけなく架空都市の
ガイドランスを受けたけれど

居室が与えられた
狭いけれど不自由はない

暗くなれば灯りがつき
明るくなれば消える

栄養食は不味いが
一日の分がポストに入る

遠い昔の音楽や映画も
アーカイブで見られる

チャットも飽きてきたから
外へ出よう 探検だ

勾配のある緩い通路の
カートを止める

ドコヘイキタイノデスカ？
ボタンを押さないと動かない

なんとなく歩く
そんなことはできない

何がしたいか
決まったら動き出す

緑が見たくなったら植物園
泳ぎたくなったらプール

調子が悪ければクリニック
お酒やスナックもバーにあるよ

今日は長かったなあ
急に居なくなってゴメン

これが生まれ変わったボクだよ
また様子は知らせるからね



サイバー・シティの第二日目

夜景が薄れてくると朝
やはり嬉しいものだ

何をしようか スケッチか
そう鉛筆画を始めたんだけど

上手く言えないけれど
全てが魅力的 特に細部が

時計を分解したとき見た
あのマイクロシティかも

想像が現実になっていく
ヤワな夢なんかでなく

確かなものがある
緻密につくられたシティ

ここがどんなに素敵か
ぼくに詩が書けたら

今日はここまでさ
また続きがあるから

つまり つまらないもの
がない世界なんだ

エレベーターで上がり
あとはカートで移動する

お金だって?
そんなものはない

何でもタダだよ
仕事は誰にでもある

依頼がいっぱいあって
好きなものがあれば取る

人間臭いものは何もない
サイバー世界は無味無臭さ

ボクには心地よい
余り心配しないでね

こんなに楽しんでいる
それだけ分かってほしいな

サイバー・シティの第三日目

気がついたこと
ここは雲の上にある

上層階はオペレーション
中層階は居住区

下層階は生産階で
栄養食工場 衣類工場等

どこでも働く層がある
でも好きな仕事を選ぶんだ

東西南北は示されない
上昇下降の感覚はある

下降はスパイラルの感覚
上昇はダイレクトの感覚

各階の大きなデッキで
太陽を浴びることもできる

さあ 今日は何をするか
話相手に不自由はない

バーチャルだけど
恋人もできたよ

だって もう年を取らない
ずっとこの年齢でいられる

これはとてもいいこと
妙な焦りが無いからね

では これから
最上階の展望テラスに行くよ

地球が丸く見えるのだから
見たくなるでしょう 誰もが

ともかく元気になっているよ
また様子を知らせます



サイバー・シティの第四日目

ボクの恋人は 呼べば
ホログラムで現れる

向こうにはボクが
映っているはず

だから身だしなみよく
ことばも大胆に使う

「今日はとってきれいだね
緑のブローチは似合っているよ」

初めてのプレゼントも
気に入ってもらった

「絵を見せようと
昨日は徹夜で描いたよ」

会えるのは10分間だけで
それで十分さ

ボクも忙しいので
余り構ってあげられない

サイバー・シティは
音がしない

すれ違っても
会釈だけで済ます

そもそも 誰であっても
データがわからないと

グループもあるみたい
でもボクにはピンと来ない

まずは いっぱい絵を描いて
バーチャル美術館で展覧会だ

これはラバーが教えてくれた
物知りの良い娘だよ

ラバーって呼んでる
コードネームでは味気ないし

これから注文した鉛筆を
貰いに出かけるんだ

とにかく元気にしているよ
また知らせるからね

サイバー・シティの五日目

時空間のトンネルがあって
そこに吸い込まれたボク

あっという間で
ロケットより速かった

サイバー・シティに来たのは
日本人ではボクが初めてみたい

ボクはここでも
誠実に生きるつもりだ

でもね そちらは
複雑すぎるよ 何もかも

こんな巨大な構造物が
ちゃんと機能していること

それ自体が
ファンタスティック

夕日になると
シルエットがきれいだし

カートはいいよ
上階までリフトで行って乗る

そして行きたい所とへ
カートが動くんだ

そして最後は居室の前に
止まってくれる 最高さ

夜には 屋上デッキで
宇宙との交信会がある

電波が入るたびに
みんな大騒ぎさ

ボクはもっと
宇宙を知らなければ

地球人としては
恥ずかしいよ

とにかく元気になっているよ
また様子を知らせませす

サイバー・シティの第六日目

昨夜のイベント
宇宙交信会は良かった

ラバーを誘ったんだけど
「夜は眠るものよ」といなされた

金色の星が揺らめいて
電波を送って来ている

見せたかったなあ その度に
ズンズンとサウンドが響く

ここでは思考は
ことばをスルーする

ユニバーサル符号となり
言語を使う必要がない

日本語を忘れないように
こうして書いているよ

とにかく元気にしているから
また様子を知らせます

サイバー・シティの第七日目

もう七日目だ
様子が分かって来た

旅というのでなく
新境地という場所

何をするにも
マニュアルがある

午前中は仕事をする
ブロックのメーター管理

難しくはない
コンピューターのチェック

許容範囲にあればOK
なければ報告するだけだ

無数に動いているので
無数の仕事生まれる

午後からはフリー
一日が短いと感じる

ラバーと話すのは
夕方が多いかなあ

ラバーの仕事は
靴のデザインだって

そういえば 残念だ
靴を見ていなかった

とにかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第八日目

そうだ仕事と書いたけど
仕えている訳ではない

為事という字が
ぴったり合うと思う

そちらは 個性を溶かし
プリン型の型にはめて冷す

ボクは固まろうと
しなかつただけだ

どちらかというと
シュークリームがいいな

膨れ方が さまざままで
見ていると楽しいね

甘いもの エネルギーの
供給源だから 好きだ

体はクリーンミストを浴びて
ほんと清潔そのものさ

服は支給品で ちょっと
メタリックで気に入ってる

ラバーなんて ラベンダーの
色がかかったメタリックなんだ

美しい人だよ
ラバーはボク以外知らない

プログラムが一致したら
その組み合わせは不変だ

だからこそ
気を使って話すのだけど

二人で何かできないか
ということ 共同作業で

今度 発表会があるので
そこでヒントをもらおう

とにかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第九日目

こっちに来てから
疲れることを知らない

ストレスフリーで
それが不満と言えば贅沢だ

人類は こんなサイバー社会を
作ってジェネシスを残そうとした

ボクは ひょっとしたら
選ばれたのかも知れない

どう伝えるかで
印象が良くも悪くもなるね

これだけは言える
素晴らしいシステムができている

出身地はいろいろで
考えも違う人びとがいる

でも それがなんだ
宇宙交信の会でも感じた

いずれは この地球も
滅びるのだって

ジェネシスと言えば
生物の種を保存するらしい

遠くに建っているのが
そうだとニュースにあった

復元してどうするんだらう
牛を飼育して搾乳するのかな

ミルクが恋しいな
冷たくて甘かった

今日は回顧モードだ
ラバーにミルクのこと話して上げよう

そうそう あらゆる味の
栄養補助錠剤があるというよ

ともかく元気にしているから
また様子を知らせます

サイバー・シティの第十日目

ボクにはまだ心がある
人としての心だ

でも いつかは
なくなっていくんだろうな

ボクが選ばれたのは
「妙な忝意がない人」だったから

そう聞かされた
ここでは夢や意志は障害因子となる

上意下達の社会なら
それらも必要だろう

大人に夢を宛がわれ
異様に膨らませられたら

あとは破裂するか
萎むだけだろう

ボクは夢が嫌いだ
そんなボクが採用された

この構造物に居住する
何万という個体はどうだろう

はじめから あんな風でなかった
ボクみたいに入居してきたのだろう

だけど慣れてしまい
感動の心も消えてしまえば

ただのロボットじゃないか
ボクはまだ人でいたいよ

だから忘れないように
毎日 これをつづっているという訳

ともかく元気になっているから
また様子を知らせませす

サイバー・シティの第十一日目

ずっと遠い宇宙の電波をキャッチする
宇宙交信はとても魅力的だ

そちらでは 地球を覆う膜のような
大気圏から出たら宇宙旅行だという

こちらでは 電波が届かない範囲から
宇宙とっているよ

もう調べ尽くしたのさ
同じような類の生き物はいないって

だから精度やパワーの高い装置を
作っている研究・製作チームがある

みなをみていると
ボクもなにかしなくてはと思う

難しいことを知らなくても
チームにはいっぱい作業があって

ネコの手も借りたいようだ
ここにはネコもいないしさ

いつか加えてもらえればいいな
毎日 ズンズンって音が響いて

ロックを重く大きくした音さ
ほんとうは音がないので作ったそうさ

そうしないと交信の確度が
体感できないからね

きょうは跳んだ話だったね
ラバーとはこんなことも話すんだよ

ともかく元気にしているから
また様子を知らせます

サイバー・シティ第十二日目

ボクのいのちは
年を取らないからこのまま

メンテナンスは必要
でも壊れることはない

数は増えすぎないように
誰も彼もが来れないしね

ボクはラッキーだった
ちょうどひとつの空きがあった

いつも思うことの
念が強かったのかな

もうすっかり住人の顔
わがもの顔をしている

ステンレスに映るボクは
我ながらカッコいい

魂を包むのは 肉体でなく
薄いメタリックな皮膚

血も流れていない
内臓なんかもないし

熱もないんだ
触ると冷たいから

でもね 心は熱い
燃えているのが分かる

恋しているかも
恋されているかも

サイバー・シティ第十三日目

そうそうラバーがボクのことを
ミツルって呼んでいる

何でそうなったか知らない
でも 気に入っている

ミツルとラバーの世界は
まるで万華鏡のように

シャラシャラ シャラシャラ
集まったり 離れたたり

美しい 動くモザイク
厭きが来ないのさ

「こんな制作は どうだろう
デッカイ万華鏡を作らないか」

ラバーはちょっと気乗りがしない
大きいより 小さなほうが良いって

手が器用なんだなあ
顕微鏡も使わないかって

ここはケンカしてでも
譲れないところだ

でもね 譲った
ボクは紳士だから

ラバーが笑ってくれたら
それだけでいい

とにかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第十四日目

今日で二週間たった
でも一週間とは何だろう

七日間に一日の休み
このリズムが当たり前

ここでは休みという観念がない
コンピューターは休まないから

頭を冷やすときと
気乗りがしないときは休みだ

この二週間で ボクの忙しさ
分かってもらえたかなあ

ほんと これを書くのは
ボク自身の記録でもある

思い出みたいに感傷的でなく
段階を文章化しておきたいし

今日は ミルクの錠剤をもらって
舐めてみた たしかにミルク

「この味を忘れないようにね」
するとラバーはケタケタ笑う

「ミツルとミルクだって」
最初の字が ミだという

たしかにそうだが
そんなことが嬉しいのか

案外と 単純だな
ボクのほうが深いと思う

でもね 楽しい時間
ラバーとのチャットは最高

とにかく元気になっているから
また様子を知らせます



サイバー・シティの第十五日目

今日で半月か
ここでも月はおなじ

かぐや姫のように
ミステリアスではないけれど

月面にはコンピューターの
大切なバックアップがある

物流倉庫みたいなものがあちこち
まるで物置き星というところ

気温の変化もないし
地球上より保管しやすいって

じつに国々の陣取り合戦も
あったみたいだけど

結局は 人類として
存亡の危機の前には

月の土地は占有禁止になった
歴史ってそんなものかな

バーチャルではあるけれど
月にはもう家が建っている

月面不動産 そんなチームもある
まあ、遊びの延長だけでも

どこだって 灰色が広がって
景色が一緒じゃないか

ボクは沢山だね
家なんかほしくない

この居室で十分すぎる
落ち着いて快適に暮らすよ

「宇宙船の乗員募集」を見つけた
帰らない旅だと書いてある

行ったきりだって
それも悲しいよね

宇宙を突き抜けたら知らせるという
ミッションで不死身のチームが挑む

今日は月がきれいだ
大きく感じる

ラバーとチャットして
ふかふかのベッドで寝よう

とにかく元気にしているよ
また様子を知らせます



サイバー・シティの第十六日目

こちらでは悪いことができない
誰も苛めたりできないよ

徒党も組めないし
肩を組むこともだ

悪いことを企んでも
ちゃんと解析がされる

もしこのシティに
良くないとなれば

こちらではおしまいさ
お払い箱ということ

道徳や法律はないけれど
許可・不許可か判断される

そんなに難しいことでない
上司も部下もいないし

称賛も 叱責も
ノルマも ないしね

そうそう 鉛筆画でシティを描きあげた
部屋の内部の絵も描いたよ

端っこにチョコンとあるのは
青い鳥だよ みえるかな

ボクの美意識で モノクロだ
カラーはこれだけ 他はつけない

とにかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第十七日目

こちらでは 誰もかも
引きこもっている

たむろする習慣とか
ガヤガヤする楽しみがない

それに耐えられないものは
まずはこちらに選ばれないさ

今日はインテリアを見せよう
クリーンミストは身体を清潔にする

成分はなんだろうね
青い光線とわずかな湿気だ

オペレーションデスク
これがメインな部屋

あとはベッドとソファ
ドアも扉がないよ

ボクしか入れないシステムさ
超・超・超 個人主義

皆 レベルが高くて
懂れてしまう

目を止めてくれる絵や
制作ができたらと思う

毎日 細密画を十センチ四方描く
そして60日たてば完成さ

まずは 構想 そして攻め方
あとは着々と 進めるんだ

ともかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第十八日目

もう聞きあきましたか
ボクは こんなに話すのです

でも 分かってくれたら
うれしい とても

カートで最上階まで行って
設計図用のソフトを借りてこよう

万華鏡は 大きくなると
重さが出てくるから

材料は軽い素材で
組んでみよう

鏡の種類は
沢山あって選べない

ラバーにデザインをしてもらい
ボクは設計と組み立てだ

だいたい三メートル位
芸術的な造形は好まれる

楽しみだなあ ラバーは
どんなデザインをしてくれるだろう

きっと持ち手にこだわるだろうな
ドラゴンの彫刻があったりして

そうだ 望遠鏡で見たときの
星を落とし込んで 回せないだろうか

こんなことを考えていれば
一日はすぐにすぎるよ

ともかく元気にしているよ
また様子を知らせます



サイバー・シティの第十九日目

きょうは何もしない日
考えを整理する日

急激な変化があったし
ボクはジェットコースターな気分

またおいしい錠剤を貰おうかな
お腹は減らないけれど 味がほしい

紅茶とアイスクリーム
抹茶とケーキ

どっちにしようか迷う
たかが錠剤一錠にね

それを舐めながら
天井をみつめる

回顧モードに入る
新聞を思い出す

毎日殺人だの 事件だの
警察だの 火事だの

ボクの手は
汚れていない

傷つけたことも
盗ったこともない

いや もう十分
思い出すと暗くなる

いまはこんなに素敵
美しいところに住んでいる

ともかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第二日目

ボクには適応力がある
ここにピタッと合っている

理想郷というべきか
いやなベタつきがない

他人の薄い関心も受けず
ヒソヒソ噂にのぼらない

存在感の透明性がある
創作品が明かすだろうが

建造物は輪切りにすれば
ドーナツ三つを付けた様だ

ひとつのドーナツの中心に
それぞれのエレベーターがある

三本のおおきな円柱を中心に
ひとつの構造物ができている

日光はすみずみまで入る
どこもかしこも明るい

そういえば こどもも
老人も見ないなあ

住人は男女の特性を持った
シティに必要とされる個体

その中には ボクがいる
これは自慢すべきことかも

今は声を出す必要がない
ラバーとの音声会話だけ

明日も 宇宙交信の会があり
楽しみにしています

ともかく元気になっているよ
また様子を知らせませす

サイバー・シティの第二十一日目

もう三週間がたった
あつという間だった

人気もない 動物気もない
無機質の世界があるんだ

そのことに感動している
ボクなんか 呑気ものよ

こちらにも
危機感があつたんだ

自動化されて 機能して
永久に続いていけるかもしれない

そう安心したいけど そうでもない
地球のカタストロフは止められない

そのため 地球脱出も
選択肢のひとつなんだ

永久動力機関のように
動いた力が減衰しないとか

コンピューターが自分を
マネジメントはじめている

異星人が乗っ取ったときは
自己破壊する手はずだ

ボクはまだまだ
秘めた力を出すつもり

ともかく元気にしているよ
また様子を知らせます



サイバー・シティの第二十二日目

一方通行じゃない
そちらのことは全部みえてる

こちらのことを知らせて
安心してほしいと思うボクです

そちらでは 一生は長く
なかなか苦しいよね

お金って 何だったろう
同等の価値があるものと交換できる券

貯めたり 使ったり
借りたり 返したり

怒ったり 喜んだり
妬んだり 諦めたり

祈るひともあるそう
金運がくるといふ波動を信じるひとも

そんななかでも
創作やパフォーマンスはどうだろう

一円にもならないって
詩人がボヤいていたね

それは需要と供給の関係なんだ
歌はコンスタントに売れている

だんだんとデジタル化する
そんな時代だったよな

みな価値観が変わって
見えないものの存在を気づき始めて

でも怖くて
信じたくないって

こちらではこうだ
創作には価値がつく

未来を描いたイメージを
かたちにしてきたからね

ボクも あこがれる絵がある
こんな風にできるなら 楽しんで描く

ともかく元気にしているよ
また様子を知らせてます

サイバー・シティの第二十二日目

ラバーのことを
もっと話そう

実在した人かどうか
そんなことは関係がない

髪が少し見えるんだ
すき間から 緑の色

声がいいんだよ
鈴のような響き

音波か周波数というか
一度 比べてみたい

ボクの勧めた
ミルクの錠剤もOK

だんだんと教えてあげないとね
甘い方のミルクは ミルキーみたい

ミツル ミルキー ミルク
こんがらがってしまいそう

いま嫌なことを思い出した
ニュースで知ったんだけど

そちらでは 変な女性がいるね
「ゲームがわたしのリアルなの」と

自分が産んだ子どもを
ネグレクトした母だ

それは間違っているよ
ちゃんと育ててあげないとね

ゲームはゲームだ
分身であるアバターは

物語で活躍するから面白い
現実ではパッとしないけども

そこではヒーローになれる
そこで満足するのさ

ここを眺め回す
窓の外は夜景がきれいだ

建物のなかには 廊下も
LEDのライティングが素敵だ

ともかく元気にしているよ
また様子を知らせます

サイバー・シティの第二十三日目

もう一年もいる気がする
すっかり慣れてしまった

クリーンミストから
毎朝が始まるのだよ

どこからか音楽が流れ
良い香りがする

地球の季節や気象は
屋内まで影響しない

いつも一定に
エアコンディションされている

でも微妙に暑さや寒さが恋しいな
これではボヤクこともできない

そうそう不服や文句も懐かしいな
言える相手があることも

でもボクは前向きだ
せっかくここにいるのだから

思いきって挑戦したい
宇宙服に着替えた夢をみた

ハートを持っていて
年もとらずに意欲がある

理想的なんだろうか
ボクみたいなのが

できたらラバーも一緒に
いつか言い出すつもり

嫌だと言うかもね
靴のいらぬ宇宙船なんて

ともかく元気になっているよ
また様子を知らせます



サイバー・シティの第二四日目

この服は破れないので
ずっと着ていられる

でも気分をかえたかったり
お洒落をすることもできるさ

識別のためじゃない
最後に残したボクの矜持かも

ラバーは頻繁に変えている
そんなに変えなくてもいいのに

ボクはここに来て優しくなった
誰をも許せるようになった

その人の表情には
人生がかかっている

不満な人々の顔に
足るを知っている顔

絵を描くってことは
内面に入ることなんだよ

いい顔をしているのは
そこまで悟れた人々だ

ここでは銀のマスクを外さない
未知のウィルスが怖いからさ

そうそう思い出した
病院のロビーで友達に会ったことがある

その人のお母さんが 近づいてきて
おむすびとサンドイッチをくれた

美味しかったなあ 笑った笑った

病院が楽しいなんておかしいね

ここはそんな施設はない
修理できなければ終了さ

まあ滅多に壊れることはないし
パーツ交換を指示されて治るけど

ともかく元気になっているよ
また様子を知らせます